

## 編纂 雜誌

過去は反省と悔恨で、現在は奮闘と努力で、未來は希望と光明に満ちて居る。悠久の過去から永遠の未來へと絶えず流れ行く「時の力」は嚴肅な回顧を教て居る。逡巡と懷疑と暗黒が去つた」と、四圍の一師が年頭に述べられたが何と云ふ尊い宣言であらう……。

文學必ずしも全藝術ではないかも知れぬが、毎年一度づつしか生れぬ此の棲神、私共としては尊い生命の躍動であるのに何と云ふ貧弱な藝術品であらう。いたづらに文字を弄ぶ思索的遊戲、層も越え得ず殻も破らず線外にも飛び得ぬ、廢殘と形骸の遺品としか見られない、誰しもそう思ふのは眞實に情け無い事である。御互ひにもう少し社會文化に對して宗教的表現價値に見醒めてもらはればならぬ。第二號第一卷として堂々編輯して見たもの、此れが祖山文書の粹華として世に出るかと思へば涙ぐましい。潑刺たる意氣が何處にある、切實なる宗教的生命が何處に通つて居る、世相百般の問題に對して不徹底と安價な妥協のみではないか、此の悲惨な闇影を諸君は嬉しく見られるのか、もう少し讀書趣味と、文書傳導に熱を持つて戴きたい。願れば確に意義深重な過去であつたではないか、聖誕七百年、平和祝禱會、立正大師號宣下、と吾々青年求道者の血肉踊躍の時に、更生と轉換と純化に「吾れはずんば石叫ばん」の大神命が次から次へと去來したではないか、其間に於て吾人は如何なる宗教運動を爲し得たか、沓を渡つた深夜に大空に響き渡る除夜の梵鐘を聞く毎に「自己を知れ」「自己を救へ」「自己に覺醒せよ」全身がおののくでは無いか、靈性の枯れ果てた冬の野に闇黒の影が「既成」の二

字で寛の如く四面を塞いで、吾人をして泣かして居る、破綻と改革のみでは現代人は満足し得ぬまでに、吾人の頭角の上に出て居る若き宗教家の胸に燃え盛る焔は驚く可き革命の使としての自覺である。如來子であり如來使である吾人は、聖者の法風……、聖者の御懷に……、何で安逸と賴墮であり得やう、ウンと勇猛精進であらねばならぬ。

今の處プロレタリアである同窓會としては毎月一回づつ、發行したいのは、ほんさうに希望する所であるけれども、年一回が最大限である。然も此の第二卷第一號が生れるまでには既に、三代相續の難物であつた、部長も幹事も共に過去二年間にどれだけでもがいて見たか、誠に會員諸君に對して申譯けの無い事である、その罪はどちらにも負ふ義務は有るまいが、幹事そのものか悪者になつて置かう。同窓會としての詳細な記事は事の有る都度文學部から、身延教報と天業民報とに、掲載する事になつて居るから今は只骨目の概録に止めて置く。

大正十年三月の臨時大會から、七月の定期大會から、大正十一年六月の定期大會から、十一月の臨時大會と可成の變遷があつたので部長幹事の任免ばかりでも余程の歴史を持つて居る。十一年度の初めの幹事は江原亮勇君（講演部）福島瑞岳君（會計部）渡邊泰深君（運動部）高山惠忍君（文學部）、十一月改選の幹事は岡觀修君（講演部）太田純志君（文學部）下田光泉君（運動部）立谷長康君（會計部）となつた。

會長は小泉院長現下で、副會長兼會計監督は富木教頭、文學部長伊丹教授、運動部長鈴木教授、講演部長中條教授である、大正十年七月七日江原亮勇君の東京雄辯會出席報告あり、九月三日皇太子殿

下御歸朝奉祝茶話會あり、十月十六日には在京同窓會紀念參拜あり十月二十七日より三十一日まで、江ノ島鎌倉横須賀方面に修學旅行あり、十一月九日宇田川教授送別茶話會あり、十二月五日會計幹事富田君依願免職せられ江原幹事兼任と決す、十一年一月十一日新年茶話會あり、二月十六日宗祖降誕會に於ては全校各教室の室内裝飾中一の緣門中一の塚原三味堂中三の徳勝童子中四時宗の靈夢中五の人物展覽會高全のコーヒー接待等、各々趣向をこらし雨天にも關せず非常な盛會であつた。夜間の余興としては聖劇劇聖者の半生、佐渡塚原阿佛屠師伏、喜劇萬歲題目、西洋奇術、歌題目等參觀者四百名實に稀有の盛況であつた。四月十二日には東京別院に舉行せられた法主小泉日慈和尚謝恩會に太田純志神同義法二君出張參列した五月二十三日から二十八日まで東京日光中山の方向に靈跡參拜の春季修學旅行あり、七月五日清水教授遷化の爲め本葬參列代表者として結城瑞光君渡邊泰深君出張された、九月一日には舊教頭關本龍門師を送り、新教頭富木義廣師を迎へ、全生徒、設深支院、深敬病院長學院出身者諸氏の出席あり、又學院の追憶も層一層の基礎付けられた事を痛感した。九月十二日龍口法難會茶話會並幻燈會を開催した、十月四日には臨時學生大會を開き秋季運動會の件に就て議し、十月二十七日學制發布紀念として陸上運動會を開き、大々的に祖山健兒の勇猛精進振りを遺憾なく發揮した。十月三十日學制發布五十年式典執行、十一月十一日入營者石黒湛然君秋山清吾君辻行眞君森泰常君送別茶話會開催、十一月二十日立正大師諱號宣下書奉迎二十一日奉安大法會等であつた。

もつと詳細の事件を報導するのは當然であるが、教報や民報紙上と記事の重複するのは好ましい事でないから此の位で許して戴いて

此の第二卷第一號が宗祖入山六百五十年といふ嘉辰に産聲を擧げた事は、のみならず二月十六日の聖日を卜して發刊した事に、何等かの意義と、深刻なる印象を思ひ致して戴きたい。現今、宗教對藝術問題の渦中に、何物を見出さんか現代人はもがいて居るのか學師は、「聖人凡化よりも凡人聖化」と垂訓されて、居る。私達青年僧侶は幾多の醜き階級差別と、政略鬭争より脱して、退嬰保守を擊退せねばならぬ。そうして燃ゆるやうな自覺と、嚴肅な氣分に、世法即妙法の靈妙味を眞に體驗せねばならない。(赤重)

## 講演部から

時運の趨行、今や兵武の交戰其の跡を陰し、方に舌鋒を交へて、其の俊ぎを削る兵和戰となつた。

惟ふに、平和戰自ら文筆、言論の二途が有る、文筆の効顯亦驚歎すべきで有るが、一たび四筵を壓する雄辯の快起らば文筆自ら第二位に陥るの感が有る、曰く彼れは間接的、消極的で有て、此れは直接的、積極的、實際的で有る謂つべし雄辯の途たる其の範曠く、其の用多なりと。

知らずや西曆B.C.年間アテネの志士デモステネスが、雄辯を揮ひグリークの危急を救はんとして、西紀十六世紀にマルチン、ルーテルの宗教革征の叫び又浩ける大雄辯ではないか。或は德行、言論、政治、文學の四科を立て、殊更にアンターの光を説き人道の軌範を示した東洋の哲人孔子は、當時の周を以て、天下を統一せしめ中華永遠の計を畫らんとしたのも、亦雄辯を以てしてではないか。覆天の大聖佛陀の長廣舌は法界を蔽ひ、末法癡季の長暗を照破せる萬餘